超高齢･多死社会に向けて
～胃ろうをめぐる家族の思いは～

ＮＨＫ報道局社会部記者
池田誠一

私の問題意識

- 寝たきり･重度の認知症で胃ろうをつけている高齢者。

→本人の意思確認は不可能なまま、長期間延命。

何のために生きるのか。
誰のための人生なのか。
なぜこうしたことが起こっているのか。

全日本病院協会の実態調査

- 「家族票」に注目。
- 胃ろう造設を決めたのは

  「本人」　1～13　%

  「家族」　72～84　%

  「医師」　11～16　%

胃ろう患者の多くは本人の意思確認困難。

「家族」の意思で延命されていることが明らかに。

全日本病院協会の実態調査

- 「胃ろうしてよかった」　５３～７１　％
- 「よくなかった」　　２～７　％
- 「何ともいえない」　２５～４０　％

家族が「よかった」と思っている割合が高い。
一方で、「何ともいえない」も少なくない。
この中身は何か。

胃ろう患者家族　事例①

- ＧＨ入所者の８４歳母を看取った５７歳の長男。
- 「母がこのまま死んでいいとは思えなかった」

→胃ろう増設。一時はアイスを食べることも。

半年後、死亡。

「母の死を受け入れるための時間ができた」

親と別れ難い子の思い。

しかし「家族の心のケア」のための胃ろうや延命なのだろうか？

胃ろう患者家族　事例②

- ９３歳の祖母を３７歳の孫が5年前から自宅で介護。
- 3年前、胃ろう増設。理由は「１００まで生きたい」と祖母の言葉。
- 造設後、好きな水彩画も描いた。
- 仕事辞めて介護する孫　「後悔していない」

→「本人の意思」もあり、「胃ろうのメリット」がよく表れたケースといえるか。

胃ろう患者家族　事例③

- ７７歳の義母を４０代後半の義娘が自宅で介護。
- 重度の認知症。2年前、急性期病院を退院する際、胃ろうを増設。「胃ろうしかない」と理解。
- １日3回の胃ろう管理。「家を離れられない」
- 「本人はどう思っているだろうか」
- 「機械的に生かし続けることに手を貸しているのでは･･･」　葛藤の日々。

現状は

- 胃ろうはじめ、終末期の医療・介護、死の迎え方についての「無知・無関心」。
- 一方で急速に進む高齢化。認知症高齢者の増加。

超高齢・多死社会への準備なしで終末期を迎えた人たちが、自分の意思で最期を選べていない。

対策は　①家族への支援

- 聖路加看護大　倉岡（旧姓・野田）由美子助教

「家族の判断支援ガイドライン」

胃ろう造設のメリット・デメリットをわかりやすく提示。本人の意思・延命効果・予想される本人と家族の生活の質を踏まえて最終的に判断・選択へ。

→　家族の葛藤を減らす効果が期待。

対策は　②「終活」

「終活」＝人生の終了へ向けた準備。
超高齢・多死社会へ向けては不可欠の考え方ではないか。

- 「リビングウィル」を書く市民レベルの取り組み
- 「エンディングノート」など。

最期の迎え方・死生観の国民的議論が必要に。

求められる「リビングウィル」